再発見の祈祷札

松江城天守創建に関わる祈祷札について

稲田　信　内田　文恵　居石　由樹子

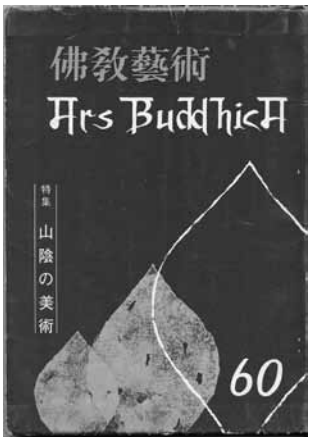
はじめに

本稿は、松江市史編纂事業の基礎調査として行っている松江市内寺社史料調査の一環として、松江神社所蔵の棟札類を調査した際（2012年５月21日）、松江城創建に関わる祈祷札２枚を確認したので、その概要について報告するものである。

この２枚の祈祷札は、城戸久氏が1966年（昭和41）４月30日発行の「松江城天守」『仏教芸術』において、1937年（昭和12）７月に氏が松江城天守を実測調査した際に４階に所在したと敢えて記したものである（城戸久「松江城天守」『仏教芸術』60：以下、「城戸論文」）(注１)。

1955～60（昭和25～30）にかけて松江城天守は解体修理され、『重要文化財松江城天守修理工事報告書』(注２)が刊行されたが、「城戸論文」も指摘するように、この報告書にはこの２枚の祈祷札に関する記述はなく、また、松江歴史館が所蔵する解体修理時の諸記録（長らく松江城本丸の再建櫓内に収蔵されていた）にも祈祷札に関する資料は残されていない。松江城天守創建に関わる重要な資料にも関わらず、1937年に城戸氏が確認して以後、その所在をたどることが出来なかったのである。

なお、和田嘉宥氏の研究により、松江城創建に関わる祈祷札の存在については、「右明和三年（1766）丙戌卯月初旬写之者也　御破損方」の奥書のある『御城内惣間数』(注３)（国文研究資料館所蔵）に、上記奥書に続いて「御天守四重目並塩蔵ニ大般若札ニ慶長十六年辛亥ト有之関原御陣ヨリ十三年目御成就御祈祷と見ル」と記す貼紙があることからも確認されている。



『仏教芸術』60表紙

天守の創建については、出雲私史に「十六年（慶長）内城及天主閣成。地曰亀田山城。曰干鳥城。皆依旧地名也。」とあるなどによって、慶長十六年(一六一一)完成と認められている。ただ筆者は、昭和十二年七月、この天守を実測調査した際に、左のような祈祷札が四階に所在したことを見出している。二枚あって、当時一枚は読了出来たが、他はかすかに慶長十六の記年が判読されるばかりであった。長三尺、幅四寸七分、厚二寸七分の檜板の表に

慶長十六　暦　　欽
梵字　奉読誦如意珠経長栄処
正月吉詳日　　言

とあり、裏面には文字はない。（第２図）

この祈祷札は恐らく古記に照らして、天守完成の時と認められ、それが慶長十六年（一六一一）正月であったことを確認させるまことに重要な資料である。（昭和三十年発行の重要文化財松江城天守修理工事報告書にこの祈祷札の存在が掲げられていないのは、不審であって、その後紛失したものか、どうか。よって敢えて、ここに紹介したわけである。）

城戸久「松江城天守」『仏教芸術』60抜粋

（この抜粋部分には「第２図　松江城天守祈祷札（昭和修理前）」とある２枚の祈祷札の写真が添えられている。原文は縦組）

１．祈祷札の現況について

２枚の祈祷札については、一部虫損が認められたが、いずれも保存状態はよく、「城戸論文」掲載の写真（「松江城天守祈祷札（昭和修理前）」:『仏教芸術』60　P134）と比較しても形状の変化は認められない。また、墨書の肉眼による判読具合も城戸氏が1937年に判読出来た内容とほぼ同様であり、表面の劣化が進んでいるとは認めがたい。幸いにもこの75

年の間、保存環境のよい状態で保管されていたことが分かる。

祈祷札に記された墨書については、島根県古代出雲歴史博物館の協力で行った赤外線調査により、1937年（昭和12）時点で判読がほとんど出来なかった１枚についても（「城戸論文」）、その大半が判読できた。２枚の祈祷札は表面中央に記された願文によって識別することとする（注４）。

（１）「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札

法量は、願文の記された面を正面とし、総高70.6㎝、肩高（右）69.9㎝、肩高（左）69.7㎝、上幅14.2㎝、下幅14.2㎝、厚さ0.7～0.85㎝である。

形状は、長方形の板の上部の角を切り落として山形（三角形）にする尖頭型の祈祷札である。尖頭はわずかに左に寄る左右非対称で、上部の幅と下部の幅は同じである。底辺の２隅とも切り欠きは無い。左端中央と右端中央やや下に虫害等のためか欠損がわずかに認められる。

材質は杉材（注５）である。割り肌が認められることから割り板を削り、仕上げは表面が台鉋で、裏面は鑓鉋の痕跡が残ることから鑓鉋によるものと分かる。裏面には四周に取り掛けの痕が残る。

設置方法は、釘穴が上下２か所認められ、元はどこかに打ち付けられていたことが分かる。「城戸論文」によれば、1937年に松江城４階に所在していた祈祷札の裏面も調査されていることから、すでに当時は取り外されており、置札のようになっていた可能性もある（「城戸論文」には「所在」の状況は記されていない）。上の釘穴は中央からやや左寄りで尖頭の下12.3㎝、下の釘穴は中央から少し右寄りで底辺から14.7㎝である。釘穴からは打ち付けた釘の形状は判然としない。表面の釘穴の上下には鉄釘の錆であろうか、黒色化した染みが認められる。

（２）「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札

法量は、願文の記された面を正面とし、総高81.0㎝、肩高（右）79.5㎝、肩高（左）79.7㎝、上幅13.5㎝、下幅13.5㎝、厚さ0.5～0.65㎝である。

形状は、長方形の板の上部の角を切り落として山形（三角形）にする尖頭型の祈祷札である。尖頭は左右対称で、上部の幅と下部の幅は同じである。底辺の２隅とも切り欠きは無い。左上端と左下端に虫害等のためか欠損が認められる。

材質は杉材で、割り板を用いる。仕上げは両面とも台鉋による。

設置方法は、釘穴が上下２か所認められ、元はどこかに打ち付けられていたことが分かる。「城戸論文」によれば、1937年に松江城４階に所在し、裏面も調査されていることから、すでに当時は取り外されており、置札のようになっていた可能性もある。上の釘穴は中央からやや左寄りで尖頭の下11.6㎝、下の釘穴は中央から少し右寄りで底辺から13.1㎝である。釘穴からは釘の形状は判然としない。表面の釘穴の上下には鉄釘の錆であろうか、黒色化した染みが認められる。また、裏面には上釘を軸に回転させたような痕跡があり、小さな紙片の付着（注６）も数か所認められた。

２．祈祷札の墨書

２枚の祈祷札は、いずれも表面の中央上端に梵字、その下に願文を大きく墨書し、右側に年（慶長十六歴）、左側に月日（正月吉祥日）を墨書する。また、左右上端には梵字を囲むように四天王を表すと考えられる四封「＞＜」を墨書する。裏面には墨書は認められない。先に記したように、「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札は城戸氏も「城戸論文」で指摘するように全ての墨書を肉眼で判読できた。一方、「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札は、肉眼では判読がほとんど出来なかったが赤外線調査によってほぼ全ての文字が判読できた。

なお、「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札の梵字は「バク（釈迦如来）」を表す。「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札の梵字は「チ（ヂ）クマン(般若心経)」或いは「キリーク（如意輪観音、阿弥陀如来)」を表す。翻刻文は次の通りである(注7)。

（1）「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札

（表）

慶長十六暦　欽

（梵バク）奉讀誦如意珠経長栄処

正月吉祥日　言

（2）「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札

（表）

慶長拾六年　辛亥　大山寺　敬

（梵）奉轉讀大般若経六百部　武運長久処

正月吉祥□（日か）

□（白か）

おわりに

城戸久氏が「城戸論文」で紹介した２枚の祈祷札が確認できたことで、松江城天守創建に関わる重要な情報をあらためて多様な角度から検証できるようになったことは幸いである。城戸氏は「城戸論文」で、「この祈祷札は恐らく古記に照らして、天守完成の時と認められ、それが慶長十六年（一六一一）正月であったことを確認させるまことに重要な資料」と指摘している。様々な祈祷の要因が想定出来る中で、慶長16年正月に祈祷が行われたこと、その時の祈祷札が松江城天守に所在していたことで、これまで明確な史料のなかった松江城天守の創建年代を慶長16年正月以前と看做すことも可能となった。

「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札の赤外線撮影、墨書翻刻により、慶長16年正月吉日の祈祷には天台宗大山寺が関わっていたことも明らかになった。一方で、松江城を築城した堀尾氏は高野山奥の院（和歌山県）に一族の墓所を設け、松江城の鬼門（北東）には真言宗千手院（松江市石橋町)、裏鬼門（南西）には真言宗報恩寺（松江市玉湯町）を配置するなど、真言宗との関係も極めて深い(注8)。祈祷札や関連史料を通して、松江城築城時の加持祈祷や宗教的背景、その後の松江城に関わる宗教的行為の系譜も見えてくる可能性がある。今後の多様な調査が求められる所以である。

（注１）城戸久「松江城天守」『仏教芸術』60　―特集　山陰の美術―　毎日新聞社　1966

（注２）重要文化財松江城天守修理事務所編『重要文化財松江城天守修理工事報告書』1955

（注３）和田嘉宥氏から、『御城内惣間数』（大学協同利用機関法人　人間文化研究機構　国文学研究資料館蔵）巻末の貼紙にある「御天守四重目並塩蔵ニ大般若札ニ慶長十六年辛亥ト有之関原御陣ヨリ十三年目御成就御祈祷と見ル」との記述は松江城創建に関わる祈祷札に関する記事であるとのご指摘をかねてよりいただいており、「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札の墨書翻刻により、この卓見を再確認することができた。『御城内惣間数』は奥書に「明和三年丙戌卯月初旬写之者也　御破損方」とあり、明和３年（1766）に書写されたことが分かる。『御城内惣間数』については、和田嘉宥『御城内惣間数』（本書掲載）に詳述。

（注４）国立歴史民俗博物館『「非文献資料の基礎的研究（棟札）」報告書　社寺の国宝・重文建造物等　棟札銘文集成』―中国・四国・九州編－1993　等を調査の参考とした。

（注５）樹種同定調査による。「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札も同様。分析結果については、渡邉正巳「松江城祈祷札の樹種同定及びウイグルマッチングによる年代測定」（本書掲載）に詳述。

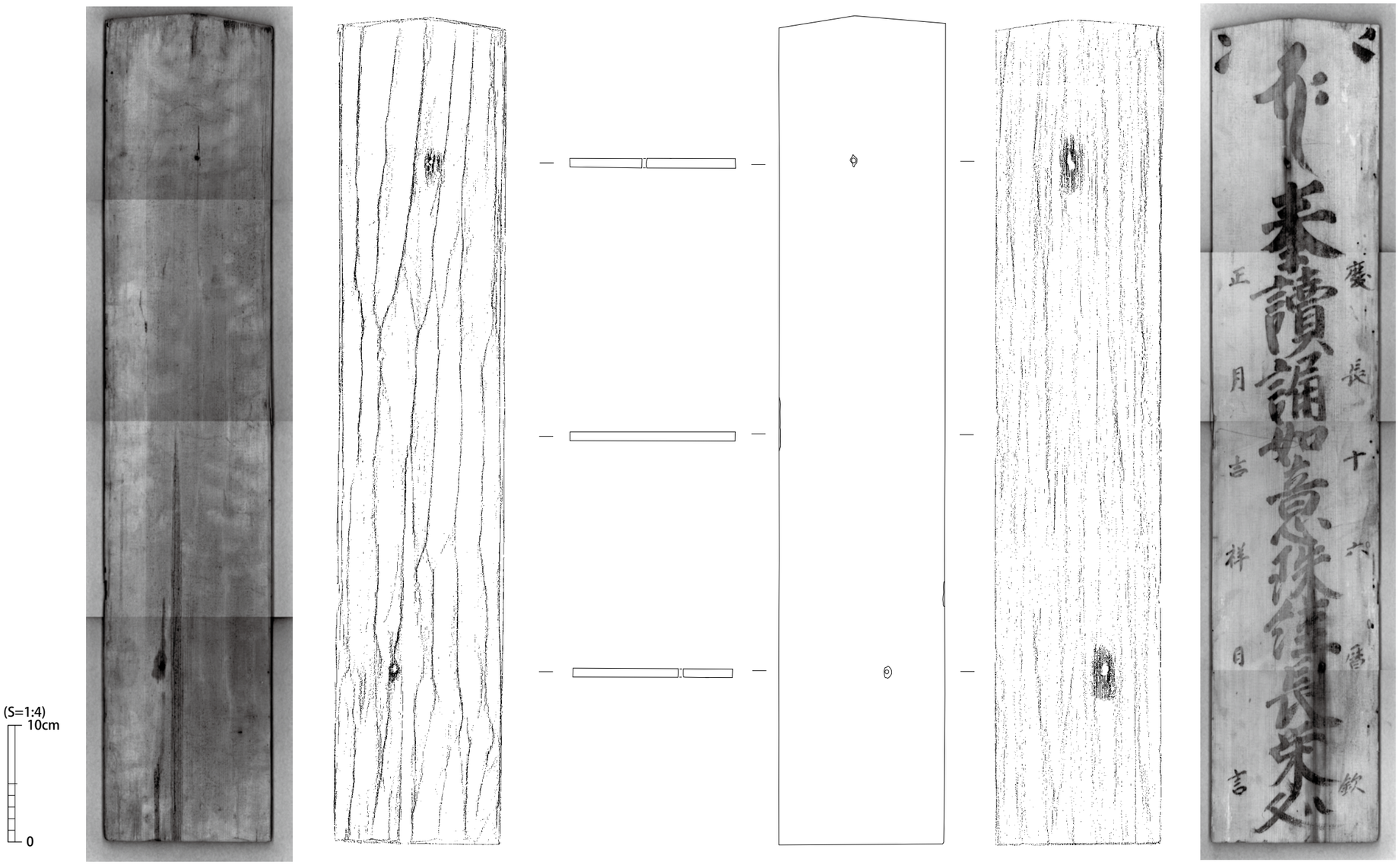
（注６）付着した紙片の分析結果については、安部己図枝「「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札付着の紙片について」（本書掲載）に詳述。

（注７）如意珠経については、高野山大学密教文化研究所西原司朗氏から「如意寶珠轉輪秘密現身成佛金輪呪王経」の略、との説明を受けた。

（注８）西尾克己、稲田信、木下誠「高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について」『松江歴史館研究紀要』第３号　松江歴史館　2013、高野山奥の院には堀尾一族の墓所として、関係する13基の五輪塔、宝篋印塔が現存し、堀尾吉晴、忠氏、忠晴、忠晴娘の石塔などが並ぶ。「奥院絵図」（宝永４年）、「高野山奥院総絵図」（寛政５年）などにも墓所が描かれている。高野山での堀尾氏の宿坊は龍生院（後に大円院に引き継がれる）で、紀州藩が編纂した『紀伊續風土記』「高野山の部」（天保10年）の龍生院の項には、「（前略）堀尾吉晴主此天の霊異を仰信ありて宮殿を修し正五九の月には武運栄久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す 且堀尾家雲隠両国の太守たりし時建立の碑数基あり 伊勢亀山石川侯先操を追ひて壇契篤し」とある。堀尾吉晴は高野山での武運栄久などの誓祈を乞うており、松江城創建時の祈祷が高野山でも行われた可能性は高い。

［本稿は、松江市史編纂事業の基礎調査として行っている松江市内寺社史料調査の一環として、2012年（平成24）５月21日に松江神社で実施した木札調査の成果を基とするもので、調査には稲田信、内田文恵、居石由樹子があたり、本稿の執筆、祈祷札の墨書翻刻、実測、採拓も分担して行った。赤外線撮影は同年５月25日に卜部吉博国宝化推進室長とともに島根県古代出雲歴史博物館の協力を得て行った。墨書翻刻などでは史料編纂室職員・松江歴史館学芸員、写真撮影では伊藤孝一氏、図面の浄書では仁島ゆかり氏の協力を得た。祈祷札は殺虫処理（脱酸素材を用いた殺虫法）を行い、現在松江歴史館で保管されている。］

「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札

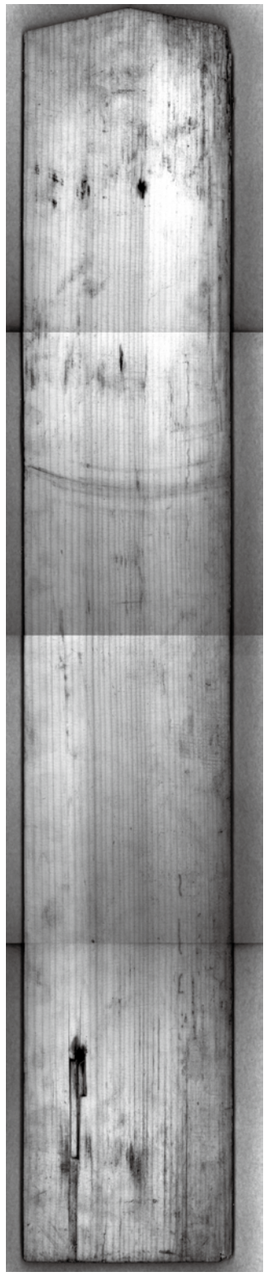


赤外線写真（裏）　拓本（裏）　実測図（断面）　実測図（表）　拓本（表）　赤外線写真（表）

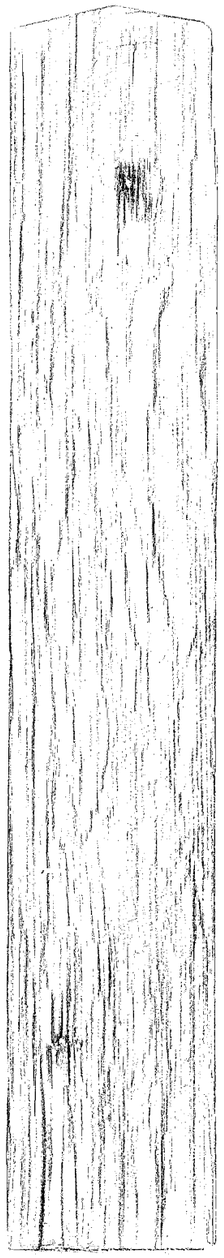
慶長十六暦　欽
梵　奉讀誦如意珠経長栄処
正月吉祥日　言

翻刻文

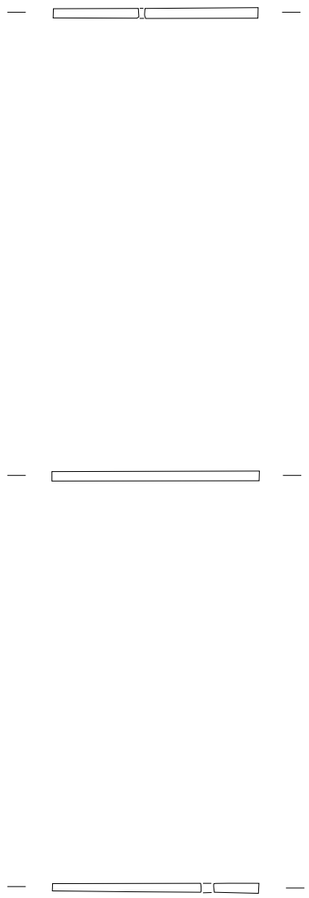
「奉轉讀大般若経六百部武運長久処」祈祷札



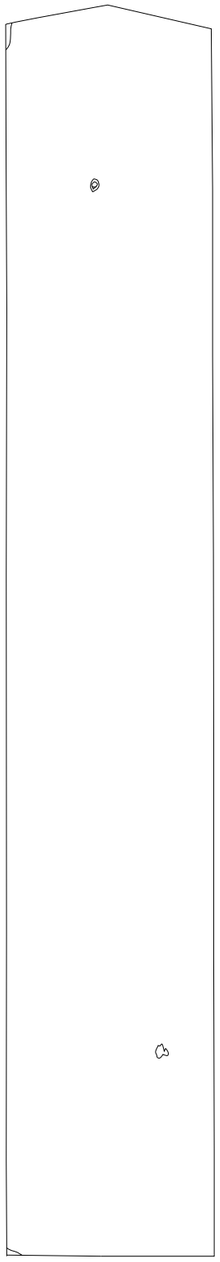
赤外線写真（裏）



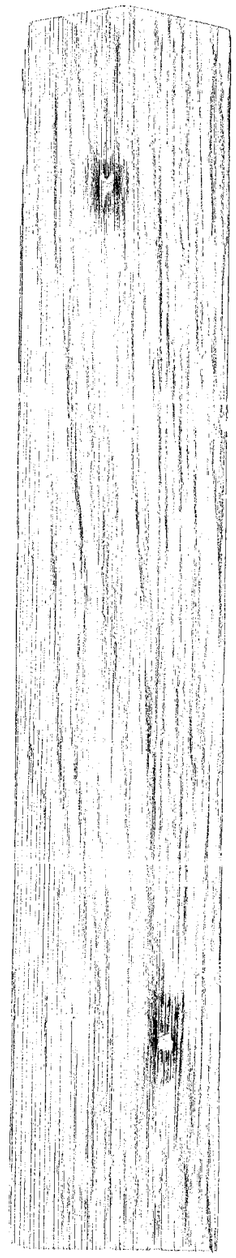
拓本（裏）



実測図（断面）



実測図（表）



拓本（表）

赤外線写真（表）

（S=1:4）
10cm
0

慶長拾六年　辛亥　大山寺　敬

（梵）奉轉讀大般若経六百部　武運長久処

正月吉祥□（日か）

□（日か）

翻刻文

謝　辞

この度、松江神社で保管されていた棟札、祈祷札を調査するにあたり、乾隆明松江市史編纂委員には、編纂室への情報提供と調査への働きかけをいただき、松江城創建に関わる祈祷札調査のきっかけを作っていただきました。松江神社宮司永岡章典氏には調査に訪れた私たちに対し多大な御便宜と御協力をいただきました。これまで松江神社に関わられた皆様が保存環境のよい状態で大切に保管されてきたことに深甚なる敬意を表します。千手院名誉住職大北哲也氏には、松江藩に関わる祈祷について、梵字の解読については大北氏及び高木訷元氏（元高野山大学学長）の御教示をいただきました。藤岡大拙氏（松江歴史館館長）には願文の解釈等について、西和夫氏（神奈川大学名誉教授）、和田嘉宥氏（米子工業高等専門学校名誉教授）には木札の調査方法について、後藤史樹氏には祈祷札の仕上げ方法について御教示をいただきました。森寛勝氏（高野山普賢者院住職）、藤田光寛氏（高野山大円院住職・高野山大学学長）、木下浩良氏（高野山大学図書館課長）、西尾克己氏（前島根県古代文化センターセンター長）には、高野山と堀尾氏との関わりについて御教示をいただきました。記して感謝申し上げます。